

口承文芸の態様とその観念

―菅江真澄の「古神社縁起」を導入に代えて―

星野 岳義

一 はじめに

口承文芸の態様とその観念につき、菅江真澄の「古神社縁起」を振り出しにしながら、究明してみる。本稿では、「語りもの」なる術語を用いるが、これは幸若舞とか説教浄瑠璃とか上方落語とかのように、話術を専らとする伝統芸能、とするのが通常の解釈である。もともと、本田安次論文は、能楽にも人形浄瑠璃にも歌舞伎にも、語りものが大きな役割を務めている、と指摘している^①。また、星野岳義論文は、語りものの詞章と、採物神楽の詞章とが、素材を共有していると主張した^②。してみると、語りものを厳密に定義するのは困難となるが、通常の解釈のほかに、これと交渉を有する詞章全般を、包括するものと捉えた^③い。以下に研究の、動機と目的と方法を述べてみる。

まず、動機を述べる。菅江真澄『つゆの塵束』は、文書の抜き書きであって、『菅江真澄全集』第一一巻に翻刻されている。

『つゆの塵束』には「古神社縁起」という、文意未詳の文書が筆写されており、これが「御領分神社仏閣縁起」の異本であることは、近年なつて志立正知が解明した^④。たしかに、藤原庫治本『御領分神社仏閣縁起』と比較すると、寺社を羅列した「書上げ」の箇所、安倍合戦を描写した「安倍合戦之次第」の箇所、草分氏の由緒を説いた箇所など、いずれも「古神社縁起」と合致している。菅江真澄は「古神社縁起」に対して、「……いとはかなげにかきなしたれど……」と懷疑的に評価しているものの、最晩年の地誌『月の出羽路』仙北郡では頻繁に引用した^⑤。この直前に脱稿した、『雪の出羽路』平鹿郡には、「古神社縁起」の引用が低調なことから、『月の出羽路』仙北郡の起稿後に、菅江真澄の心境に変化があったと察せられる。

つぎに、目的を述べる。「古神社縁起」が、寺社の略縁起とも、語りものの詞章本とも、草分氏の由緒書とも、捉えうる代物であることは既記をみた。この「古神社縁起」から、在地の伝承を取り込んでいるとか、語りものを記録化しているとか、といっ

た特徴が看取できるならば、口承文芸研究に益するところ大であろう。そこで本稿では、口承文芸の態様がどのようなものであるか、という問いを立てたい。従来は、芸能の詞章は芸能研究から、在地の伝説は伝説研究から、記録は歴史民俗学から、と別個に取り組まれる傾向があった。このたび、「古神社縁起」をはじめ、各領域の境界にある事例を紹介することにより、各態様の因果関係を模索しうると考える。

そして、方法を述べる。構成は、「はじめに」「結果」「考察」「おわりに」の四部とする。結果では、口承文芸の態様に取り組むうえで、示唆に富む事例を、三点ほど紹介したい。すなわち、菅江真澄の「古神社縁起」、讃岐里神楽と下蚊屋荒神神楽、梅若丸の伝承である。これらを踏まえた考察では、芸能の詞章、在地の伝説、記録からなる、三態様につき探究する。なお、本稿の主題は新しいものでないから、関連する先行研究は無数にある。たとえば、柳田国男には「東北文学の研究」が、折口信夫には「日本文学の唱導的発生」が、中山太郎には「日本盲人史の一節」があった。しかし、本稿で紹介する事例の、直接の先行研究ではないので、「研究史」の章は割愛した。

二 結果

二―一 菅江真澄の「古神社縁起」

結果にさいして、さいしょに、『つゆの塵束』所収の「古神社

縁起」を取り上げる。「古神社縁起」の異本に当たる、『御領分神社仏閣縁起』を奥浄瑠璃と位置づけたのは、阿部幹男であった。阿部幹男によると、「書上げ」は国掛祭文に当たり、「安倍合戦之次第」は古浄瑠璃正本『八幡太郎義家』と共通するという⁽⁸⁾。いっぽう志立正知は、「安倍合戦之次第」が、奥浄瑠璃として語られていたか確認できていない、として奥浄瑠璃説に慎重な立場を取っている。さらに、「古神社縁起」の成立事情については、研究者によって解釈がまちまちで、かつ状況証拠を凌駕する資料はないようである。

ここで、私見を交えながら、本稿における論点を確定したい。第一に、「古神社縁起」の成立事情に関して。いくさ語りが秋田県大館市雪沢にあるという報告や、奥浄瑠璃に正本がないという学説は、参酌に値すると思われる。これによると、「古神社縁起」が語りものの詞章本であったとしても、その成立事情を立証するのは困難となろう。第二に、「書上げ」に関して。寺社の羅列は、源為憲『口遊』や後白河法皇撰『梁塵秘抄』にもみえるので、宗教性の薄まった物尽くしも解釈できよう。第三に、「安倍合戦之次第」に関して。これに対する先行研究は、いくさ語りという側面に傾注してきたわけだが、そうではない側面にも着目すべきであろう。第三の具体例として、渡し守による熊野参詣を、「古神社縁起」から引用したい。

それ扱置爰に又山田矢走の渡守太荒次郎と申者あり、熊野山参詣の折から、紀の国那智の御山にて俄に出来たり、日天皇

は真のやみになりけり、十五六の童子出来り、○○浄土の其次に竜宮の乙姫の宝物は花咲のちやうちん一尺二寸のうし四寸四方の表をとり候はゞ、義家の御代になるべしと光を放てうせにけり。乙姫の前に集り、右の品々申上ければ、放べきとは思はねども、熊野参りのしゆしやうさに、四代年季を切て貸り給ふ。其ちやうちん御持参して、束をさして出ければ仙北平鹿郡に出にけり、横手蛇の崎橋へあがりける。⁽¹²⁾

「○○浄土」の箇所を、『御領分神社仏閣縁起』の異本である、秋田県公文書館所蔵『社寺縁起』と比較すると、「……いなりちやうとのそのつぎに、りうぐうちやうとのおとひめの……」⁽¹³⁾とある。だからこれは、渡し守による浄土巡りなのであって、つまり御伽草子のなかの異界遍歴に相当しよう。渡し守が帰還したのは、秋田県横手市四日町の蛇の崎橋で、この橋は水蛇伝承や源義家伝承といった、口承文芸の稠密な場所であった。

さらに、「古神社縁起」には、「……御台公連宗任ともに光福寺の淵にしずみ……」⁽¹⁴⁾との一節がある。秋田県大仙市花館の洪福寺淵も、怪魚伝承や沈鐘伝承といった、口承文芸の稠密な場所であった。鶴岡市立図書館所蔵『奥羽軍談』には、

潜此淵に入、数刻を経て浮上り、畏て申上げるハ、淵底に一壇あり。其下に大き成る穴有。夫ヲ潜行に水なく、金銀を鑲たる屋形有。其中に入見候得バ、床に鉄炮立置。側に僧一人

居、汝何者ぞ。早疾帰れと被申候。⁽¹⁸⁾

とみえ、水中異界の存在を確認できる。以上から、「古神社縁起」の担い手は、在地の伝説を管掌していて、かつ中世物語を継承していた、と推察される。なお、「古神社縁起」には現れないが、安倍貞任には、目の見えない兄がいたという。目の見えない僧侶が、目の見えない登場人物の物語を、自己の身上を重ね合わせつつ語ったらしいとは、お月お星の昔話や、平景清の伝説とから看取しうところである。⁽²⁰⁾

二―二 讃岐里神楽と下蚊屋荒神神楽

結果にさいして、つぎに、芸能の詞章を取り上げる。およそ採物神楽には、身体表現に依拠しながらも、ほとんど身体を動かさず、話術に専念する事例がある。たとえば、香川県の採物神楽である讃岐里神楽には、「島」「島渡り」「島栄え」などという演目があった。これは、ササノオノミコトとイソタケルノミコト、またはオオクニヌシノミコトとスクナヒコノミコトによる掛け合いである。朝鮮半島に渡海する物語で、内容に教義を織り交ぜるほかは、緩急自在の話術を主体としている。

民俗芸能研究は、定型の詞章の文字起こしには拘泥するわりに、このような不定型の詞章の文字起こしには冷淡であった。そこで、二〇一三年一〇月一二日に、香川県坂出市府中町の天満神社で実施された、「島渡り」を組上に載せたい。午後九時五

分からの三四分間のうち、冒頭の九分間を収録する。壮年男子の二人舞で、扮装は着面に、狩衣、差袴、白足袋の素足。掛け合いの最中は、両手で握った杖を、ときおりマイタに突きながら、神楽場を行ったり来たりする。なお、天満神社神楽の概要については、星野岳義論文を参照されたい。⁽²²⁾

イソ イヤー、こんばんは。

スサ あらら、イソタケル。こんな夜更けにどうしたんでござんすか。

イソ イヤー、今日、冷えよるな。

スサ 寒いな。

イソ こないだまで、汗ダラダラやつたのにな。

スサ 昨日の晩まで、暑かつたのにな。

イソ 暑かつたのに。いきなり、どうしたんだ、これ。

スサ もう、さっさと渡ろう。寒い。

イソ あそこの灯が恋しくなる。

スサ ホントにな。

イソ ところで、今日は、どうしたんでござんすか。

スサ 今日でござんすか。いつものようにな、一人旅に行こうかいなと思つて。

イソ 一人旅とは、それはまた寂しい。

スサ 一緒に行きますか。

イソ もう、是非とも、一緒に。

スサ お金、持つとうな。

イソ お金は持つてないでござんす。もう、祭りでお金は散在して。蛸焼きや綿菓子や買い置きしたもんでな。

スサ 現金無かつても、今はカードがあつたら構わんで。カードも持つたらんの。

イソ 持つてない。スツカラカンじゃ、スッテンテンじゃ。

スサ あつ、そうな。どうしようか。

イソ 「どうしようか」と言われても困りますな、こっちは。ええ、ええ。こつちが聞きたい、どないしたらええんでございますか。

スサ そしたらな、まあな、ひとつ歌を覚えて行かん。

イソ 歌？ あー、何か毎年、ここで教えてもらいよるような

スサ 気が、何かするなあ。

スサ 気イだけする？

イソ ええ、気イだけする。

スサ ああ、そうな。まあ、教える人が毎回変わるけな。

イソ 何かなあ、ややこしげな歌を教えてくれるんやけど、まともに、覚えた試がないんや。

スサ 西山脳外科、行きまいよ。

イソ もう、ボチボチ行かないカンかも分からんな、これ。

スサ 早いうちがええで。

イソ もう、ホンマにもう。さつき、やつたこと忘れる。

スサ あつ、そうな。それ、だいぶ重症や。

イソ ああ、何しに來たんかいな、と思つてな。

スサ 私、まだ、そこまで行つたらん。

イソ あつ、そうな。私のお父さんやのに？ お元気で何よりですなあ。それにしても、顔色があんまりようないですわね。

スサ 酒、呑み過ぎての。肝臓が悪そうなの。

イソ それは、氣イつけないカン。

スサ 肝臓悪うても、頭の方は大丈夫なの。

イソ あつ、ほうな。ところで、何の話やつたん？

スサ ああ、歌を覚えて頂きたい。

イソ 歌でございますか？

スサ あんな、神様のお徳をお讃えする、ミソヒトモンジの歌でござんす。

イソ えっ？ 神様のお徳をお叩きして、味噌一盛りで一杯やる歌？

スサ それ、どんな歌なん？ 神様のお徳をお叩きしたら、割れてしまふね。そこから漏れてきたお神酒さんで、味噌を舐めながら一杯やるん？

イソ そうでござんす。

スサ それ、全然違うよ。

イソ また、ええ歌やと思ひよつたんやけど、違うん？

スサ 神様のお徳をお叩きするんじゃないでな、神様のお徳をお讃えする。

イソ お徳をお讃えする。それ、どういうことでございます？

スサ 神様が行なつてきた、いろんな行為がございます、業績がございます。そのためにな、いまのこのな大和の国、非常に安らかに住み良いわけでございしますが、その業績をお讃えする。お叩きするんチャウ、お讃えする、お褒め申し上げる。

イソ そうでござんすか。それは、ちよつと失礼なことを言つてしまつた。

スサ 味噌一盛りチャウ、ミソヒトモンジ。サンジユウイチモンジな。ミソ――。

イソ ほう、ほう、ほう、ほう。

スサ 漢数字で三十と書いて、ミソな。プラス、ヒトモンジ。それでサンジユウイチモンジ。

イソ ヒトモンジだと――。命！

スサ 違う！ もう、アンタ。さつきから、膝が痛いように、そんなことしよると、よけい笑いよるがの。

イソ もう、階段も踏みかねるん。困るな。

スサ まあ、命はな。大事なもののじゃ、大切にせないかんで。

イソ 左様でござんすな。で、何でござんしたか？

スサ 神様のお徳をお讃えするな、ミソヒトモンジの歌はご存知ですかと、こう訊ねてな。

イソ さつきから、物忘れが悪うてな。ひとつも覚えられなくてな。これちよつと、覚えられそうにありませんが。

スサ じゃあな、細切れでお教えします。私についてくるとい

い。行きまっせ。御注連引く――。

イソ 御注連引く――。

スサ ここも高天原なれば――。

イソ ここも高天原なれば――。

スサ 集まり給え四方の神々。

イソ 集まり給え親芋子芋。

スサ 最後は、ちよつとチャウ。

イソ 違うかった？ 完璧やと思つたのですがなあ。

スサ 集まり給えな――。親芋子芋、ここにあるがね。葉っぱ

の付いたんが。

イソ これ、あの、あれ――。あのー、あれだよ。何するんやっ

たんかも忘れて。えーつと。

スサ 煮染め？

イソ 煮染め。もうホンマ、西山脳外科、行かなアカンな。

スサ 最後、チャウで。

イソ 最後だけな。

スサ 集まり給えな、もう一回言うてつと、四方の神々。

イソ 四方の神々。

スサ 左様、左様。

イソ 左様、左様。

スサ 「左様、左様」は違う。

イソ 「左様、左様」は違う？

スサ 「左様、左様」言うたら字余りや。

イソ ほんなら、もうこれで行ける？

スサ 行けん。意味、知らんだろ。

イソ 覚えたりもせんのに、意味は知らん――。

スサ あつ、そうなん？ まだ、覚えてないんの？ まあな、

意味を説明しながら言うたら、覚えるかも分からん。「御

注連引く」言うたらな、この注連縄のこと。こうずつと、

きれいな注連縄張つてあるな。「御注連縄引く」注連縄引

くことによつてな、「ここも高天原なれば」この注連縄の

結界を張ることによつて、こここの神楽場がな、高天原の

神様がお住まいになるような、清浄潔白の場所になつて

ございますよ。したがつて、「集まり給え」集まつて来

てくださいな、四方八方の神々さんと。

イソ ほー、なるほど。そりや、また、ありがたい歌でござん

すな。

スサ お分かりいただいた？

イソ ええ、ええ。

スサ ホンマに？

イソ 分かりましたで。だけど、あの注連縄の外にも、ようけ

人がおりますけど、あの人は穢れとんの？

スサ この場所が清らかなの！

イソ 左様でござんすか。それは、それは――。

スサ みなさんは、きちんと手水を取つてな、きちんとお祓い

を受けておるからな。そんな、穢れとると言うたら、失礼極まりない。

イソ それは、それは――。

スサ アンタの方が、穢れとる！

イソ もしかしたら、そうかも分からん。ちよつとお祓いしてもらわな、いかんかもなあ。

スサ あのなら、一万円位、包んで行きまい。

イソ そりゃ、持つてないが――。

スサ 持つたらんの？ タダではしてくれんで、いくらなんでも。ここの宮司さんも、タダではしてくれんわ。

イソ そうじゃろうな。

スサ たぶん、ツケも効かん。

イソ お供えモン、そんだら、持つて行こうか。

スサ お供えモン？ お酒が好きだから。

イソ お酒は、実は帰ったら、ようけあるんじゃ。

スサ たぶん、「久保田」じゃないと、いかんよ。

イソ それは、ちよつと無理かも、分からん。

スサ あつ、そうか。ま、何でもええわ。これな、歌も覚えてもううた？

イソ 覚ええました。

スサ 意味も取り敢えず、覚えてもううた？

イソ 理解しました。

スサ でな、アンタ。今日、どこ行くなつて、訊いとらんがの？

イソ それも、そうじゃな。まさか、城山温泉行くんではないわな？

スサ ちよつと、近過ぎる。今から行つたら、閉まつとるわ。

文字起こしは、録音に忠実であることを第一としたが、相槌を省略したり、語尾を復元したりした。なお、文字だけでは、理解しがたい部分を補足しておく。イソタケルノミコトが、「命！」と言うさいには、お笑い芸人の一発芸である人文字を披露している。イソタケルノミコトが、「注連縄の外にも、ようけ人がおりますけど」という人は、観客を意味する。スサノオノミコトが、「親芋子芋、ここにあるがね」と言うのは、饌供のなかに芋を発見してのこと。

讃岐里神楽「島渡り」のような、即興の掛け合いには、ご当地の事物を取り入れるなど、自由闊達な展開が把握できる。これが、讃岐里神楽だけの傾向でないのは、他地域の採物神楽を瞥見すれば、容易に理解できよう。ここでは、鳥取県日野郡江府町下蚊屋の下蚊屋荒神神楽が、二〇一四年三月二二日に六年振りに、下蚊屋集落で実施したさいの模様を報告する。なお、下蚊屋荒神神楽の概要については、星野岳義論文を参照されたい。⁽²³⁾

マツ なんとまあ、下蚊屋でな、蟬蝦の悪戯するけん。お前行つて酒造つてこい、つて言われてのう。ほんでまあ、何ぞ

あの、久し振りに、五年振り位だろうかの。

太鼓 五、六年なんの。

マツ 五、六年振りかいの。まあ、それで、何ぞ土産でも買つて
いかねばいけん。

太鼓 餡焼き焼いかいけん。

マツ うん、清水羊羹でも買おうかと思ったの。ついつい、忙
しくなつてな。

これは、「八重垣能」つまりヤマトノオロチ退治のうち、午後
八時四〇分頃の掛け合いである。下蚊屋荒神神楽は、依頼を受
けて各地で上演するが、ヤマトノオロチが乱暴をしているのは、
その上演場所という設定になっている。だから、マツオミヨウ
ジンが、出雲国つまり島根県を出発し、鳥取県の下蚊屋集落に
到着して、酒造りをする場面なのである。なお、清水羊羹は、
鳥取県米子市にある銘菓を指している。

民間の語りものは、高田瞽女にせよ美濃万歳にせよ、その多
くが衰頹し、最盛期の様子を想像するのが困難になっている。
ただ、語りものの詞章の残滓が、採物神楽などの詞章に保存さ
れているとすると、上掲のごとき自由闊達な展開があったと類
推できる。当該地域の事物を取り入れたり、物語の舞台を上演
場所にしたりすることは、伝説の在地化を考えるうえでも、看
過しがたい問題となろう。身近な例でいえば、地方巡業をする
歌手や唄家が、話の枕として、ご当地の名所や名物を取り上げ

るのと、同様であると思われる。ただし、来訪者たる演者が、
在住者たる観客に、受け入れられるためのリップサービスにほ
かならないからである。なお、芸能の詞章が、在地の伝説と、
同一の主題を共有しうることは、掃部長者譚を挙げるまでもな
く既知のところだが、必要があれば他日に論証したい。

二―三 梅若丸の伝承

結果にさいして、さいごに、「隅田川」の登場人物である梅
若丸を取り上げる。観世元雅の謡曲「隅田川」は、吉田何某の
一子たる梅若丸が誘拐され、その母親が搜索するも、すでに梅
若丸は病没していた²⁴、という哀話である。近世になると、近松
門左衛門の人形浄瑠璃「双生隅田川」、初世市川団十郎の歌舞伎
「出世隅田川」、曲亭馬琴の読本『隅田川梅柳新書』などに翻案
された。ところで、観世元雅が「隅田川」を執筆するさい、こ
の素材となる伝説が、在地に先行していたのか、という疑問に
は正答がないらしい。

梅若丸にまつわる、在地の伝承は、東京都墨田区堤通二丁目
をはじめ、埼玉県春日部市梅田²⁵や福島県西白河郡泉崎村太田川²⁶
にある。しかし、堤通二丁目の梅若塚にしても、中世に存在し
たという証言もあれば、近世に創出したという証言もあつて²⁸、
判然としない。大橋方長『荏土図説』三は、梅若塚を相撲取り
の墓であるとし、梅若丸を架空人物とする説を転載している。

又或書^二云、梅若といへるは、台廟御代ニ梅若大夫と業平とて、二人の力者相撲の勝負有。時に梅若大夫抛殺さる、業平も強く当られほとなく死す。夫より処の者、梅若を爰に葬、塚を築き、業平ハ牛島に葬り、業平塚と云へるを、いつの頃よりかヘイをヒラとよミて、業平天神と号しぬ。在五中将は孝光^{〔光孝〕}天皇御子にて、播州在原にて卒し玉ひ、閑東に廟処有へきいはれなし。梅若丸と云ハ、京家の兄のよし狂言には作れり。しかし九百年以前、吉田少将と云公家なし^{②⑨}。

いづれにせよ、在地の伝説が成立するには、謡曲「隅田川」やこれを翻案した作品群と、何らかの交渉あったとみるのは穏当なものであろう。梅若丸の伝承につき、徳江元正論文は梅若丸和讃^{③①}の、阪井芳貴論文は日吉山王信仰^{③②}の、影響を想定した。実際、太田川周辺で梅若丸和讃を実施していたことは、高塚明恵論文が解明している^{③③}。もちろん、梅若丸にまつわる口承文芸が流布していたかどうか、につき近世に遡行して確認するわけにはいかないから、その多くは推測の域を出ないところではある。それでも、松浦静山『甲子夜話続篇』巻一四に、以下のごとき記述があるのは、留意してよからう。

莊の北東隅田川梅若塚は、人普く知る所なり。或る筵席にて人の語しは、四五十年前まではかの塚ある木母寺辺の堤上など、年々梅若の幽霊とて兒童の形を往々見る者ありしが、今

にては無しと^{③④}。

梅若丸にまつわる、伝説とも世間話ともつかない口承文芸が、近世後期には流布していたと把握できる。畢竟するに、「隅田川」が人口に膾炙されたのちに、梅若丸にまるわる口承文芸が存在しえたという、ささやかな証左となろう。

以上を整理してみる。能楽は、動作などを伴わなければ、三人称現在進行形の語りものであることは、先哲の指摘してきた通りである。この語りものとしての「隅田川」は、謡本という文字化を経て、かつ種々の翻案を介しながら、在地の伝説に取り込まれていったといえる。

三 考察

結果を交えながら、口承文芸の態様とその観念について、探究してみたい。結果を概観すると口承文芸には、芸能の詞章、在地の伝説、記録からなる、三態様が確認できる。もちろん、各態様の呼称は便宜的であって、その概念を体現したものではない。芸能とはいえ行事や民謡を含むこともあろうし、伝説とはいえ昔話や世間話を含むこともあろう。記録には、語りものの詞章本のほかに、随筆や説話集を含めてよからう。なお、民俗芸能の由緒を説明する場合、これは媒体が名木名石でなく構成要素になるだけなので、在地の伝説に分類される^{③⑤}。

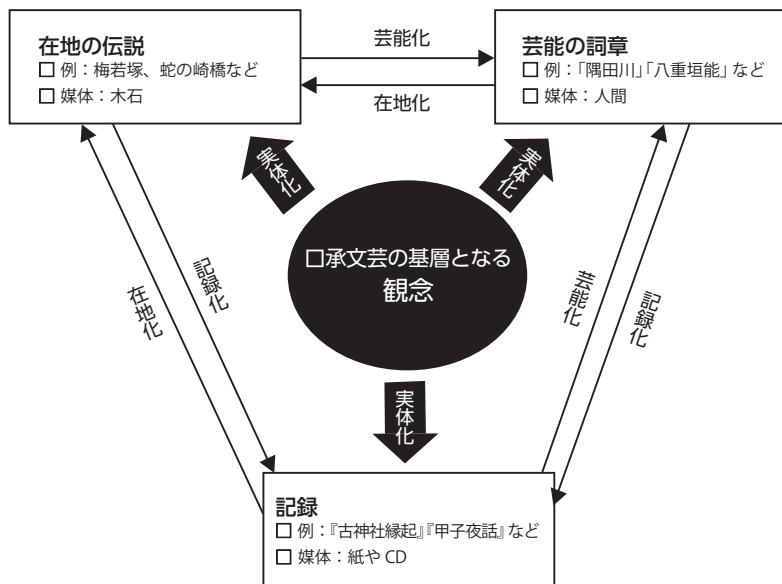


図 口承文芸の態様とその観念

各態様は、単独に存在しているけれど、相互に影響し合っていて、しかも他の態様に移行したがる。各態様が、他の態様に移行すると仮定したとき、理論上ありうる可能性は六方向である〔図〕。ここでは、結果の事例に即しながら、態様間で移行する様子を、整理したい。「古神社縁起」は、現状では記録が残るのみであるが、これは芸能の詞章であった余地があり、その詞章には在地の伝説が窺える。採物神楽の詞章は、移行する徴証は認められないが、これは在地の伝説と無関係ではないようである。梅若丸の伝承は、能楽なる語りものとして誕生し、この記録たる謡本が翻案されて、在地の伝説になったと解釈できる。もとより、これらは図式的な説明に過ぎないから、現実の口承文芸は、いっそう複雑だったのではない。

他の態様に移行したがる、と先述したが、これには相応の動機が必要であったと推察される。結果で確認した通り、採物神楽の詞章には、当該地域の事物を取り入れたり、物語の舞台を上演場所にしたといった、リップサービスが施されているのだ。ちなみに、近世に流行した、鹿島の事触れは、主人の留守に押し掛けてみたり、里人から金銭を巻き上げてみたりした⁽³⁶⁾ようである。少なくとも前近代には、疫病などに起因する不安感、いふなれば付け込む隙があつて、この隙を埋めると引き換えに、伝説が在地化したと想定しうる。その想定範囲において、民間宗教者は里人に対し、権力を

有していたと指摘できる。政治学の古典的学説では「AがBに
対して、Bが本来やりたくない何かをさせることができる」とき、
AはBに対して権力を有する」わけで、これは態様間の移行に
もあてはまろう。

ところで、各態様の開始および終了は、どのようであったか。
終了は単純で、芸能を演じる人間が杜絶し、伝説の寄る辺とな
る木石が消滅すれば、自然に終了する。ただし、記録は焼失で
もしない限り、文意未詳になつても厳存し続けるわけで、「古神
社縁起」はその適例といえる。終了に比較すると開始は、説明
するのが容易でない。口承文芸の態様とは、これを生み出す口
承文芸の観念を、実体化したものであり断片化したものである。
口承文芸の観念とは、その時代その場所を生成する気風であり、
無形である場合が多い。第二次世界大戦の長崎の惨状や、東日
本大震災の仙台の混乱は、記録から想像することはできても、
雰囲気を経験することはできない。口承文芸に即すると、中世
物語らしいとか、熊野修験っぽいとか、といった直感的な言い
回しになると考える。

四 おわりに

口承文芸の態様とその観念につき、菅江真澄の「古神社縁
起」を振り出しにしながら、究明してみた。結果では、菅江真
澄の「古神社縁起」、讃岐里神楽と下蚊屋荒神神楽、梅若丸の伝

承を取り上げ、考察では、口承文芸の態様とその観念を提示し
た。その各態様である、詞章や伝説や記録というのは、口承文
芸が実体化した、いわば仮の姿である。たとえば、液体ならば
水であり、固体ならば氷であり、気体ならば水蒸気であるもの
の、本質がH₂Oであることに相違はない。吾人は、水や氷や水
蒸気に相当する、詞章や伝説や記録に注意してしまいが、窮極
の目的はH₂Oに相当する観念の解明にあるといつてよい。とす
ると、芸能の詞章は芸能研究から、在地の伝説は伝説研究から、
記録は歴史民俗学から、と別個に取り組まれてきたことに、大
きな乖離はないものと思われる。

さて、本稿を執筆するにあたり、新たに派生した論点がある
ので、そのうち一点に触れたい。讃岐里神楽「島渡り」は日本
列島から朝鮮半島へ、下蚊屋荒神神楽「八重垣能」は島根県か
ら鳥取県へ、という道行きの場面を含むものであった。ほかに
も、道行きを含む芸能として、謡曲「放下僧」とか人形浄瑠璃
「曾根崎心中」とかを、容易に想起できよう。ところで、筆者は
二〇一四年に、沖縄県名護市で住み込みの勤務をし、上司と同
僚の理解を得て、豊年祭に休暇を頂戴した。この豊年祭で実見
した組踊りは、九月二日に名護市数久田の「本部大主」、九月三
日に名護市山入端の「万歳敵討」、九月四日に名護市宮里の「操
義伝」であった。そのすべてに、道行きの場面が存在し、しか
も未見ながら組踊り「久志の若按司」には、道行き口説なる名
場面があるらしい³⁷。そもそも、組踊り「執心鐘入」と謡曲「道

成寺」には関連があると指摘されるように、組踊りには古風な性格が垣間見える。組踊りが、いかなる経緯で、沖縄県本島北部地域に分布しているのか熟考を要するが、ともあれ貴重であることに相違はない。

芸能の道行きに、興味深い詞章のある事実は、たとえば伝説研究において、小栗判官の通過伝説を考えるうえでも、無益でないと思える。なぜならば、前述したごとく、芸能の詞章と在地の伝説とに、大きな乖離がないからである。そうであれば、組踊りの道行きを吟味することは、道行きの本質を理解する有力な手掛かりとなる。もつとも、これを吟味するには、組踊りの詞章に注意するだけでなく、いかに成立し継承してきたかを、社会的背景を顧慮しながら叙述しないといけない。現状では、その準備が筆者になく、訴えるべき説者も見当たらないことから、これにて擱筆する。ただ、調査研究に協力をいただいた、秋田県と香川県と鳥取県と沖縄県のみなさんに、深謝を添えた。なお本稿は、日本口承文芸学会の第三九回大会にて発表した、「菅江真澄『つゆの塵束』所収「古神社縁起」の論点整理」を、増補して定稿としたものである。

注

- (1) 本田安次「民俗芸能研究の課題」『演劇研究』八号、一九七六年、一四頁。
- (2) 星野岳義「鹿児島県の「將軍舞」」『鹿児島民俗』一四三号、

二〇一三年、四五頁。

↓星野岳義『口承文芸と民俗芸能』収載、日本評論社、二〇一六年刊予定。

- (3) 志立正知『歴史』を創った秋田藩』笠間書院、二〇〇九年、二二九頁。

- (4) 阿部幹男『東日本貞任伝説の生成史』三弥井書店、二〇一二年、三五〇―三八一頁。

- (5) 菅江真澄著・内田武志、宮本常一編『菅江真澄全集』以下、『全集』と表記』第一巻、一九八〇年、三三五頁。

- (6) 『全集』第七巻、一九七八年、三〇七、三一〇頁。『全集』第八巻、一九七九年、二二七頁。

- (7) 阿部幹男「論考「御領分神社仏閣縁起」構成と性格」『伝承文学研究』三六号、一九八九年、八五頁。

- (8) 阿部幹男「論考「御領分神社仏閣縁起」構成と性格」『伝承文学研究』三七号、一九八九年、七五頁。

- (9) 志立正知「草薨」伝承と『月の出羽路・仙北郡』『真澄学』六号、二〇一一年、四八頁。

- (10) 文化庁文化財保護部『無形の民俗文化財記録』第三六集、文化庁文化財保護部、一九九三年、三三二頁。

- (11) 小倉博編『御国浄瑠璃集』斎藤報恩会、一九三九年、二頁。

- (12) 『全集』第一巻、一九八〇年、三四二頁。

- (13) 著者未詳『社寺縁起』秋田県公文書館所蔵、請求記号：A H 一七五―四、成立年未詳、二五丁表。

- (14) 『全集』第六巻、一九七六年、五〇八頁。

- (15) 『全集』第一卷、一九八〇年、三四一頁。
- (16) 『全集』第一卷、一九七一年、二一六頁。
- (17) 『全集』第七卷、一九七八年、一九一頁。
- (18) 阿部幹男「秋田の伝説と真澄」『真澄研究』一八号、二〇一四年、四六頁。
- (19) 星野岳義「安倍貞任または安倍宗任に関する伝承」『社学研論集』一九号、二〇一二年、二一五頁。
- (20) 平野直「南部喜話抄」『喜話研究』八号、一九三五年、四五頁。
- (21) 平部嶺南「日向地誌」青潮社、一九七六年、五一頁。
- (22) 星野岳義「採物神楽の語りものとしての性質」『社学研論集』二四号、二〇一四年、四七頁。
- (23) 星野岳義「採物神楽の地芝居としての性質」『伯耆文化研究』一六号、二〇一五年、四九頁。
- (24) 三宅晶子「対訳でたのしむ隅田川」松書店、二〇〇一年、一九頁。
- (25) 春日部市教育委員会編『春日部市史』民俗編、春日部市、一九九三年、四六三頁。
- (26) 広瀬典著・田子健吉編『白川風土記』『福島県史料集成』第四輯、福島県史料集成刊行会、一九五三年、六九三頁。
- (27) 万里集九「梅花無尽蔵」『続群書類従』第一二巻下、訂正三版、続群書類従完成会、一九八九年、八二五頁。
- (28) 戸田茂睡著・鈴木淳校「紫の一本」『新編日本古典文学全集』八二、小学館、二〇〇〇年、一八四頁。
- (29) 大橋方長『荏土図説』三、国立公文書館所蔵、請求記号、一七四一八六一三、五五丁裏一五六丁表。
- (30) 徳江元正「梅若譚」『国学院雑誌』五八巻八号、一九五七年、三一頁。
- (31) 阪井芳貴「山王信仰伝播と梅若伝説」『梅若縁起の研究と資料』桜楓社、一九八八年、五九頁。
- (32) 高塚明恵「梅若伝説の展開」『昔話伝説研究』第二八号、二〇〇八年、一八頁。
- (33) 松浦静山著・中村幸彦、中野三敏校『甲子夜話続篇』一、平凡社、一九七九年、三二二頁。
- (34) 星野岳義「菅江真澄の採集した公家伝承」『北方風土』七〇号、二〇一五年、九五頁。
- (35) 柄井川柳撰・山澤英雄校『誹風柳多留』二、岩波書店、一九五一年、三一頁。
- (36) 喜多川守貞著・朝倉治彦、柏川修一校『守貞謄稿』第一巻、東京堂出版、一九九二年、二二四頁。
- (37) 名護市史編さん室編『名護市史叢書』一一、名護市教育委員会、一九九一年、二二五頁。
- (38) 伊波普猷『校註琉球戯曲集』春陽堂、五三頁。
- (39) 間宮士信ほか編・芦田伊人校『新編武蔵風土記稿』第七巻、雄山閣、一九九六年、八六頁。

(ほしの・たけよし)